

ただひとりの牧者について行く

第一朗読（使徒言行録11章1―18節）

1 さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人も神の言葉を受け入れたことを耳にした。2 ペトロがエルサレムに上つて来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、3 「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言った。4 そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた。5 「わたしがヤツファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。6 その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。7 そして、『ペトロよ、身を起こし、屠つて食べなさい』と言う声を聞きました。8 わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』9 すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言つてはならない』と、再び天から声が返つて来ました。10 こういうことが三度あつて、また全部の物が天に引き上げられてしまいました。11 そのとき、カイサリアからわたしのところに差し向けられた三人の人が、わたしたちのいた家に到着しました。12 すると、『霊がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる六人の兄弟も一緒に来て、わたしたちはその人の家に入つたのです。13 彼は、自分の家に天使が立っているのを見たこと、また、その天使が、こう告げたことを話してくれました。『ヤツファに人を送つて、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。14 あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる。』15 わたしが話したすと、聖霊が最初わたしたちの上に降つたように、彼らの上にも降つたのです。16 そのとき、わたしは、『ヨハネは水

で洗礼を受けたが、あなたがたは聖霊によつて洗礼を受ける』と言つておられた主の言葉を思い出しました。17 こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか。」18 この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言つて、神を賛美した。

福音（ヨハネ10章1―10節）

1 「はつきり言つておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないではかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。2 門から入る者が羊飼である。3 門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。4 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立つて行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。5 しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」6 イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。7 イエスはまた言われた。「はつきり言つておく。わたしは羊の門である。8 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかつた。9 わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10 盗人が来るのは、盗んだり、屠つたり、滅ぼしたりするためにほかからでない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」

朗読から祈りへ

—思い込みの罪?—

ミサの始め。回心のよびかけに答えて告白する。「全能の神と兄弟の皆さんに告白します。わたしは思い、ことば、行い、怠りによつてたびたび罪を犯しました」。もう一つあるのではないか。思い込みの罪…。

聖霊を受けたペトロは主の復活を宣べ伝えるが、実際に起こることは、彼や使徒たち、兄弟たちの予想を越えたものだ。ペトロが割礼を受けていない者たち（「異邦人」と食事をするなどとは考えられないことだったし、ましてやその彼らの上にも聖霊が降るといふようなことは信じられないことだった。イエスを主キリストと信じるようになったユダヤ人キリスト者に降った「同じ賜物」が異邦人にも与えられる。これは驚きであった。「神がそうした」ということに気づかされるとき、人は静まり、神を賛美するしかない。そのような出来事を体験することによつて福音が広がり、教会が成長していく。

似たようなことは今でも起こっている。さま

ざまな思い込み、先入観が、神の働きに気づくことを鈍くする。あのような人が救われるはずがない、と大それたことを言ったり、考えたり。「お務め」をきちんと果たしているのに神はわたしに他人よりも多く恵みを与えてくださる、と思い込んだり。キリストの教えもよくわかってない人が成功するはずはない、とか…。神の「物差し」は人の「物差し」とは違っている。神の思いは人の思いをはるかに越えている。人が望まなくても、神が望めばそうなる。神の働きを人が妨げることはできない。

神の愛によつてなされた出来事に気づくとき、人は思い込みの罪に気づく。その罪の赦しも願わねばならないと思う。

—牧者はひとり—

司祭は「牧者」と呼ばれたりする。司祭が信者のお世話をするのを「司牧」といったりする。それで、司祭は自分が「羊飼ひ」だと思い、信者を「羊」と思う。信者の方も「牧者」は司祭だと思ふ。忘れてはいけない。牧者はイエス・キリストただひとり。「羊飼ひと羊」の話を当てはめるとすれば、羊飼ひはイエス・キリストであり、羊はわたしたちである。司祭も羊。

司祭はたとえ「牧者」と呼ばれるとしても、自分が羊飼ひだと思い違いをしてはならない。司祭はせいぜい「良い牧者」のもとに連れていく使命があるにすぎない。司祭が人を救うのでもなく、司祭が「門」であるわけでもない。この思い込みや思い違いは混乱を招く。司祭は自分もまた「羊」にすぎないことをわきまえていなければならない。司祭もまた、牧者であるイエスによつて導かれている者であるから、牧者の声に耳を傾け、それについて行く。

カトリック教会の秘跡と呼ばれる神の恵みは、多くの場合司祭を通して与えられる。そのことが司祭に対する尊敬を生み出したりもする。「司祭はもう一人のキリスト」という言葉さえ生まれてきた。神は司祭を通して人を救うことがあるかもしれない。だが、司祭がキリストであるわけではない。

先頭に立っているのは良い牧者。彼は門があるところを知っており、わたしたちは彼と一緒にその門から出入りする。また、イエスは自分を「門」にたとえる。この門を通つて入る者は救われる。

司祭が自分を「良い牧者」や「門」だと思ひ込んでゐるのなら、その「思い込みの罪」についても赦しを求めなければならない。